

二年学年だより

No. 6

10月号

令和8年10月1日

205 安東直之・池上和花

「文章を『噛む』」

噛めば噛むほど味わいのある文章、というものがあります。もちろん比喻です。反対に、一度噛んだら最後、ふたたび噛む気が起きないときもあります。

何が違うか？

文章自体の良・不良というよりは、読み手の側に、その文章を受け止めるだけの準備ができているか、ではないかと思います。それは予備知識ももちろんですが、心の状態（嬉しい・悲しい・テンションが高い・低い等）も関係していそうです。皆さんにも、同じ音楽や映画を視聴しても、状況次第で感じ方が変わった経験はあるのではないのでしょうか？

私が皆さんと同じく16歳か17歳だったとき、これまた皆さんと同じく、教科書に「山月記」が載っていました。当時、授業の合間などで暇ができれば（時には、暇ができなくても？）教科書の小説作品を読みあさっていた私は、この「山月記」もまた授業で扱われるよりも前に、自分で目を通したのです。そのとき、十分には理解できなかったものの、びびっときた感覚を今でも覚えています。当然、「隴西」がどこかなんて知らなかったし、「博学才穎」の意味もなんとなくしか分からなかったにもかかわらず、です。それ以来、教員になって何度か授業で取り扱っていますが、読み返すごとに少しずつ感じ方（味わい）が違います。高校生の自分の感じ方が、現在に劣っているというものではありません。当時の私には、当時なりの鮮烈な感覚がありました。それはきっと、今の自分には決して戻ってこない、16歳だったからこそその感覚だったのでしょう。噛むごとに生じる文章に対する味わいの変化はすなわち、自身の性質の変化です。変わるのは文章ではなく、自分自身なのです。

個人的には、表には見えない国語教師としてのライフワークの一つに、あらゆる文章を味わい尽くせるように、皆さんの顎力（「あごりょく」、あるいは「あごちから」）を鍛えることがあります。これからの人生で、文章に全く触れず生きていくことはできません。願わくば、卒業後の君たちが、様々な文章に楽しみつつ挑戦していける人であってほしいと思います。一つの文章との出会い、その咀嚼が皆さんの人生をどこかに動かしていくこともあるかもしれません。

せっかくなので最後に、噛めば噛むほど味のする現代短歌を一首紹介しておきます。私自身、定期的に心に浮かんでくる大好きな短歌です。定型詩（短歌や俳句）は、心に留めておけばいつでも味わえるのでオススメです。とても有名な歌なので、知っている人もいるかもしれませんが……。

サバンナの象のうんこよ聞いてくれだるいせつないこわいさみしい

（穂村弘『シンジケート』より）

（205 担任）

「高2の秋、今しかできないこと」

みなさん運動会お疲れさまでした。室内という初めての環境での運動会はどうだったでしょうか？それぞれ集団演技や応援、競技など全力を出し切った最高の思い出の一つになってくれているとうれしいです。

そして10月はいよいよ中央祭。初めての休日開催ということでたくさんの方が来られるでしょう。クラスの仲間、部活動の仲間とたくさん準備を重ねていると思います。クラスの個性や団結力を大に見せつけていきましょう。そして自分たちも中央生も外部の方もみんなが楽しめる文化祭を作り上げましょう。

3年生になると、進路に向けた取り組みが本格化し、今年のようにクラスで出店を計画したり、全員で中央祭に参加したりする機会が限られてきます。時間は有限です。中央祭だけでなく、日々の授業やその他の行事など一日一日を大切に過ごしましょう。そして、今しかできないことを全力で楽しみましょう！

（205 副担任）

